

男性家庭科教師のライフヒストリーに見るジェンダーと自己形成 — 男性学的視点から — 堀内 かおる (横浜国大)

<目的> 1994年より高等学校家庭科が男女共に必修となったことは、家庭科教育をめぐるジェンダー・バイアスを克服する第一歩であり、高等学校で家庭科を担当する男性教師も見られるようになった。本研究では、これらの男性家庭科教師に焦点を当て、家庭科教育に携わることによって彼らがどのようなことに気づき、その意識や生活にどのような変化が現れたのかを探っていく。ジェンダーの視点に基づき、彼らのライフヒストリーをたどりながら、教師として、また男性としての自己形成のプロセスを明らかにしたい。

<方法> 1998年8月に、X県下の公立高等学校で家庭科を担当する3名の男性教諭に対し、個別に約90分間に及ぶ半構造化された面接調査を実施した。調査時における教師たちの年齢と担当教科は、それぞれ38歳(家庭科と社会科)、46歳(家庭科と国語)、56歳(家庭科と英語)である。録音した会話をもとに、特に、①家庭科を担当しようと思った動機、②家庭科を担当するようになって得たもの、自分自身について変化があったことについて着目し、分析を行った。

<結果> 教師たちの言葉から、学校というシステムが内包するジェンダー構造が浮かび上がり、家庭科を担当することを思い立った動機から、それまでの<男性教師>としての生き方から「降りてみよう」とする意思が伺えた。家庭科を担当することは、男性教師たちにとって自分自身を見つめ直す契機となっており、家庭科の授業実践を通して、男性教師たちは自らの生き方を振り返り、<男性>として、<教師>として生きてきた経験をもとに、生徒たちに<生活>について語っていた。